
B面の恋

藍田陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B面の恋

【Nコード】

N1438E

【作者名】

藍田陽介

【あらすじ】

原宿。竹下通りのブティック店員、沙織は恋をしていた。幸せに満ちた沙織のランチタイム、それが彼女の不幸の序章。果たして沙織の恋の顛末はいかに？

1・A面で恋をして

沙織は浮かれ気分で、カセットテープをラジカセにセットした。マキハラの曲はいつも朝の気分を高揚させる。さて働こうという気分になるから、沙織はいつも朝一番はこのサウンドと決めていた。けれどもこの朝、ラジカセはいつもの軽快なポップサウンドではなく、アコースティックギターが奏でる音で歌いだした。

「どうなってるの？」

「あれ、いつもの曲じゃないね。沙織、どうしたの？」

店長の仁美^{ひとみ}が沙織に声をかけてきた。ブティック「キャンディ」は原宿の竹下通りの一角にあったが、平日の午前中はろくに客も来店しない。ときおりふらつと立ち寄る客もいるにはいるが、キャンディご自慢のカットソーもＴシャツも、平日に限っては、出番は高校生たちが下校する午後の時間帯以降と決まっていた。

だから平日の午前中は、仁美と沙織のおしゃべりタイムだ。客が来れば二人とも「いらっしやいませ」と声はかけたが、平日午前中の挨拶はいつもスマイル抜きである。

沙織はラジカセのストップボタンを押し、テープを停めた。テープをイジェクトして、取り出してみた。何のことはない、A面とB面を逆にしていた。今までこんなことはなかったのに。テープを裏返して再びラジカセに戻す。やっとこの時間の耳が覚えているテノール調のボーカルが始まった。

「沙織がB面からかけるなんてねエ。今までこんな間違い、なかったよね。誰か好きな人でもできたの？」

「店長するどいなア。ばれたか」

照れくさそうに沙織はやや頬を赤らめて、笑った。今はもう担当が替わってしまったが、赤坂のアパレルメーカー「ノルディック商会」のセールスをやっていた高橋祐樹^{たけはし ゆうき}は、背も高く、アパレル業界人らしいファッションセンスも兼ね備えていた。その上ギリシャ彫

刻を思わせるほどの、日本人離れした彫りの深いルックスは見事に沙織のストライクゾーンを突いてきた。それ以来、沙織にとって祐樹はステディな人となり、その気持ちは日を追うことに強くなっている。絶対間違えることのないテープのA面とB面を取り違えてしまっただけ。

でも照れくささもあって、仁美にはまだ祐樹への思いは話していなかった。仁美も特に好奇心を発揮することはなく、ただ沙織の態度の変化から、誰か好きな男ができたのだらうと思っただけである。

午前中はずっとA面の曲が流れ続けた。沙織は自分以外誰も触れていないはずの服を、何度も畳み直して並べるといふ動作を繰り返して、その日の午前中を過ごした。仁美はカウンターの奥で、商品名と数字の書かれた伝票の束を置いて、電卓と格闘している。

一瞬店内にノイズが響いて、ラジカセの音が止んだ。あれっ、と思った沙織がラジカセのところへ行く。仁美は相変わらず伝票の束を抱えたまま、ちらりとラジカセに向かう沙織に視線を流しただけである。たしかにカセットテープは停止していた。イジェクトボタンを押し、沙織はテープを取り出してみる。テープはヘッドに当たる部分から飛び出して、少したるんでいた。その上、たるんだ部分にくっつきりと紙に折り目をつけたときのような後が残っていた。テープが切れてはいなかったのは幸いだったが、果たしてこの折り目がついてしまった箇所は正しく聴こえるのだろうか、と沙織は考えた。

カウンターのところにテープを持って行き、ハサミやボールペンが突き刺さったペン立てから、細めのボールペンを一本取り出した。そうして沙織はテープの左右に開いている穴の一方にボールペンを差し込んで、ゆっくりと回し始めた。回転につれテープのたるみは取れてゆき、ぴんと張ったテープはさっきよりも折り目も気にならなくなった。

「大丈夫だった、テープ」

目は伝票に固定したまま、仁美が訊ねる。うん、大丈夫、と沙織は応えて、テープを抱えたままラジカセのところに戻った。

ふと沙織は考える。テープにはどうしてA、B両面あるんだろう。あのたるんだところから引き出せば、中に入っているのは一本の長いテープなのに。表裏を間違えると、全然別の曲を奏でるが、実際にはA面を聴いていようと、B面を聴いていようと常に一本のテープの上でA面もB面も回っているんだ。でもA面を表にしてラジカセに挿入すれば、A面に録音された曲だけが奏でられる。そのときB面に録音された曲たちは、どうしているんだろう。どこか別の世界に曲を流しているんだろうか？ もし間違ってB面の曲が、今聴こえている曲に混じったら？ AかBかなんて、たまたまそう印刷してあって、どっちを表にするかの違いしかない。そんな曖昧な境界をもった細いテープに録音されているA面とB面の曲たちが、間違ふことなく聴こえてくる不思議さに、沙織の感覚は囚われてしまった。

だから午前中には珍しく、三人連れの客が店内に入ってきたときも、沙織は仁美の声でやつと気がついた。

「いらつしゃいませ」

はつと我に返り、慌てて沙織もいらつしゃいませと、スマイル抜きの接客用挨拶を口にした。何してんの、という揶揄を含んだ仁美の視線が沙織に向けられていた。沙織はその視線を避けるように、客に歩み寄った。

「どんな服をお探ですか。今月からキャミソールが入ってるんですけど、こちらなんていかがですか」

沙織は薄桃色をした無難と思われるキャミソールを手にしたが、客はろくに沙織の話を聞いていなかった。午前中の客なんていつもそうなのだ。客に置いてけぼりにされた沙織は、同じように置いていかれた薄桃色の薄い生地をそつと折り畳んで、もとの位置に戻し

た。

結局その三人の客は、十五分ほどかけて狭い店内をゆっくり周っていたが、午前の客の流儀に則って、何も手にすることなく再び店を出て行った。沙織は何も買わない客の背中に「ありがとうございました」と声をかけ、心の中で舌打ちした。

「ああ、やっぱり午前中に来るお客さんは、買ってくれないな」

そういつて沙織は大きく伸びをした。ようやく電卓との対決を終えた仁美が顔を上げた。

「そうはいつでもさ、沙織。店に入ってきた人はお客さんなんだから、応対はしっかり頼むわよ。まさかラジカセの修理しに来たわけじゃないでしょ」

「すいません」

仁美の皮肉交じりの警告に、沙織は素直に謝った。仁美の顔は笑っていたから、本気で怒ってはいないだろう。だが店長が一心に伝票計算をしているときに、店員である沙織が客への挨拶もせず、カセットテープのことを考えていたのはまずかった。

「もうあたしの手も空いたからさ、少し早いけどお昼行ってきたいよ。どうせしばらくは、あまりお客さんも来ないし。一時までに戻ってきてね。そうしないとあたしが餓死しちゃうかもしれないからさ」

店長といっても沙織より二つだけ年上の仁美は、いつも気さくな調子で話しかけてきてくれる。沙織は素直に仁美の行為に甘えることにして、ありがとうといいながら、晴れ渡った竹下通りに飛び出す。

2、恋するカレン

竹下通りを抜けると沙織は原宿の駅から表参道に向かう通りにあるサンドイッチ店に入った。パストラムハムとチーズをサニーレタスで包んでライ麦パンにはさんだものや、エビとアボカドをシーザードレッシングで和えたものをセサミブレッドではさんだものが、沙織のお気に入りだった。今日のように晴れた日は、サンドイッチと牛乳を持って代々木公園に点在する休憩所のベンチで食べるのである。

ブティックで働くのは、一見華やかなファッション業界に生きているように見えて、内情は苦しいのだ。決して高くない給料から自前で仕事用の制服を買わなくてはならない。しかも客の前に出るのに恥ずかしい程度にファッショナブルでなくてはならず、毎日同じ服を着るわけにもいかない。いきおい食費を切り詰めるしか、生きる術はないのだ。

沙織はこの日、中央広場の池が見える休憩所に陣取り、水辺に佇んだり、明るい陽光の下で語り合う匿名の恋人たちを眺めながら、微笑ましいランチタイムを楽しんでいた。

みんな幸せそうね、私も仕事じゃなければこの幸せそうな人たちの仲間に入れるんだけどな、と考えつつパストラムサンドを頬張った。

口の中に入っていたサンドイッチを三回咀嚼したところで、沙織の口が動きを停めた。いや全身の動きが停止した。呼吸すら忘れていたかもしれない。

目の前に、名前を持った恋人が横切った。動きの停まった沙織は一瞬後に我に返ると慌てて顔を伏せた。とっさに顔を伏せたのが功を奏したか、高橋祐樹という名前を持つ恋人は、どうやら沙織に気付くことなく、彼女の数メートル手前を談笑しながら通り過ぎていった。談笑の相手も匿名ではない。たしか、麻友美といったのでは

なかったか。以前、祐樹と食事を共にした席にいた。学生時代の友人だと紹介されたのだ。あのとき彼女はまだ、祐樹から「友人」という称号しか付与されていなかったはずなのに。

沙織の脳はたった今、目の前で起きた出来事を必死に忘却しようとしたが、彼女の目はそれを拒んだ。目に焼きついた光景は、結局彼女の記憶の中に置き去りになった。半分ほど食べたサンドイッチと飲みかけの牛乳は、ベンチの近くにあるダストボックスに投げ込まれた。彼女はそのまま公園の出口に向かい、途中の木陰で三分間泣いた。その三分間で、彼女の悲しみは憎しみへと変わっていった。

駅の近くのコーヒーショップに入って、一番小さいアイスコーヒ―をオーダーした。窓からできるだけ離れた席に陣取り、節約のためにやめようと思っていた煙草を取り出した。祐樹も煙草は吸わなかったし、煙草を吸う女性もあまり好きではないようだったから、祐樹のためにも止めようと思っていたのだ。生活費の糧にもなるし、何より祐樹のためだと思えば、煙草なんていつでもやめられると思っていた。実際今持っている煙草だって、やめようと思っずと吸わないまま残っていたものだった。捨てるのもつたいない気がして、ポーチの中に入れっぱなしになっていただけなのだ。だけでもいい。吸ってしまえ。

すでにポーチの中で二週間近くを過ごした煙草は、メンソールの香りの中にかび臭さを含んでいた。しかしそんなことには構わず、沙織はやたらと煙草をふかした。隣に座っていた女子大生と思われる二人組みが怪訝そうな顔をしたが、そんなことにはまったく気付かなかった。結局沙織が注文したアイスコーヒーに口をつけたのは、二本目の煙草に火をつけた後だった。

隣で沙織が吸う煙草の煙を訝いづかった女子大生二人が、沙織にも聞こえる声で話し始めた。

「ねえ、商学部にいる浩司ヒロシって知ってる？」

「マーカーリーっていうテニスサークルにいる子でしょ。あの子ま

だ一年生だけど、もう学校中で評判になってて、今年は外の大学からも入部希望が殺到してるんだって」

「なんだ、お京も知ってたんだ。結構可愛いよね、あの子。狙ってたんだけど、それじゃ学内のほとんどの女子がライバルなんだね」

「でもさ、あんたそんな話、圭一君の前でしちゃだめだよ。圭一君だって結構可愛いって評判なんだから。圭一君と付き合ってるってだけで、私は十分ハルミがうらやましいけどな」

「そうかな。でも最近、圭一ともあまり会ってないしさ。少し焦らせてもいいんじゃない」

「こら、ハルミ！」

お京という女がハルミを叩く真似をして、二人は笑い転げた。どうやら原宿には数多くの恋が、そこかしこに転がっている様子だ。

さっきまでそんな恋人たちの囁きを聞きながらのランチタイムを楽しんでいた沙織は、もはやそのような会話に閑達な気持ちで耳を傾けることができなくなっていた。制御不能な指先で三本目の煙草を取ろうとした途端、聞き分けのない指がまだ三分の一ほど残っていたアイスコーヒーをテーブルにぶちまけてしまった。再び怪訝な顔をして、隣の二人が沙織を見た。テーブルの端から流れ落ちたコーヒーは、蛇のように床を這って、二人の足のほうへ鎌首を伸ばした。慌てて沙織は二人に、ごめんなさいと頭を下げ、テーブルの上にあったペーパーナプキンで床を這っている蛇を捕獲した。すんでのところでは蛇に咬まれずに済んだ二人は、もう沙織のことは忘れてまた談笑に戻っている。

沙織はいたたまれなくなり、三本目の煙草を諦めてコーヒーショップを出た。キャンディで働き始めてもう三年目、原宿という街もすっかり体に馴染んだと思っていたが、急速に沙織の居場所は狭められていった。それもこれも、あんなところに祐樹が現れるのが悪いのだ。いや一人なら良かった。でも麻友美なんて「友人」を連れて歩いてはいけけない。ましてや「友人」の腰に手を回して、楽しく語り合いながら歩いているなんて許せない。

やはり恋人たちは、匿名でなくては微笑むことができないのだ。自分とは利害をともしない人々がどんなに楽しそうであっても、その楽しさは共有可能である。だが恋は、その当事者と何らかの関係を持つ者が、その当事者と無関係な形で登場してはならないのだ。そんなシナリオは想定していないし、そのような場面をアドリブで乗り切れるほど沙織は芸達者ではない。

まだ昼休みは十五分くらい残っていたが、居場所を失った沙織はキャンディへと戻った。

うつむいたまま店に入ってきた沙織を、仁美はやや驚いた顔で迎えた。

「あら沙織、早かったのね。いつもなら早くてもせいぜい五分前なのに、記録更新じゃない」

「……、まあね」

笑いかけた仁美に笑い返すこともなく、沙織は真っ直ぐにラジカセに向かい、午前中のテーマソングを止めてカセットテープをひっくり返した。ラジカセはB面の曲を奏で始めた。アコースティックギターを中心に据えた楽曲が、午後の時間をやや大人のムードで染めていった。

「店長、食事に行ってください。私、替わりますから」

「ああ、そう。それじゃ行ってくるね。あとをお願い」

近寄り難い雰囲気、体中にまとって戻ってきた沙織にどう話しかけていいかわからず、押し出されるように仁美は店を出て行った。あとには色とりどりの洋服と沙織だけが残された。また泣こうかとも思ったが、その間にもし客が来ると困ったことになると思い直し、やめた。だから一度悲しみから憎しみに変化した心は、憎しみの形をしたまま、沙織の心の中でわだかまっていた。

レジの脇にある椅子に腰掛けて、さっきのコーヒーストップで隣り合った女子大生コンビの話を、いつしかリピートしていた。仁美に祐樹のことをもっと早く打ち明けていれば、せめて仁美とさっき

のコンビのように冗談めかした会話もできたかもしれない。でももう遅い。

祐樹はどうして私ではなく、麻友美を選んだのだろう、と沙織は考えた。祐樹と店で出会い、家の電話番号がわからないから、会社に電話をかけて食事に誘った。一度目の食事の後、タクシーで帰る道すがら、祐樹の家は沙織の家よりも近かったので、彼は福沢諭吉を一枚沙織の手に握らせた。目の前のマンションは、彼の歳を思えばかなり豪華なマンションに見えた。そうして二度目の食事のときに、彼は麻友美を連れてきたのだった。「友人」として。

それから彼を驚かせようとして、彼は平日会社にいるはずだと思いい立ち、沙織が休みの日に彼の家にこっそりと一人で行った。彼の住むマンションの近くで、電信柱の影に隠れて帰りを待った。一時間以上待ったと思うけれど、全く苦にならなかった。いや、むしろ彼の帰りを密かに待っているだけの時間、彼女はおのが心の中で何度も祐樹の驚いた顔を反復し、秘めやかな悪戯に込み上げてくる笑いを必死でこらえていたほどだ。

空は道路を黒く照らしていたが、電信柱と同じ間隔で点灯している街灯の周囲だけが昼間のままだった。昼間の部分に祐樹の姿が見えたとき、沙織も慌てて、一番近い昼間の空間に移動し手を振った。「お帰りなさい」

沙織が呼びかけると、三つ向こうの昼間の空間に立ったまま、祐樹はしばらく凝固していた。

やっぱり驚いているわ。計画通りね。

さっきまで何度も心の中で繰り返したシミュレーションの通り、驚いた顔をした祐樹を見て沙織は満足だった。好意を持っている女性が突然目の前に現れたら、どんな男だって驚くはずだ。さあ、そろそろ路上で固まっている愛すべき男を溶かしてあげなければ。私の魔法で。

沙織は動けずにいる祐樹に、自ら駆け寄った。目の前に立って、今までキャンディで培った^{つちか}どんな客の顔もほころばせずにはおかな

いスマイルを作った。これで二人は、ますます気の置けない仲になるはずなのだ。

「驚いた？」

「あ、ああ。僕の家、よく覚えていたね」

「ええ、もちろんよ。あなたの家を忘れるわけないでしょ」

完璧な笑顔を保ち続けたまま、沙織は首を縦に振り応えた。戸惑ったような顔のまま、祐樹は突然の来訪者を追い返すわけにもいかず、彼の部屋へと誘った。その夜、沙織は祐樹との愛をより確かなものにしようと考えた。今までこんなに積極的になったことがあっただろうか？ そう思うと少し恥ずかしくなったが、それでも彼女は着ているものを脱ぎ、自ら祐樹におのが体を委ねた。

セックスはもちろん初めてではないが、祐樹が沙織の中に入ってきたとき、沙織は生まれて初めて喜びに達した。やっぱりの男こそ、自分とぴったりの男なのだ。その夜、沙織は自分から何度も求め、あつという間に三回もエクスタシーを得た。

重ね合った体が汗ばんでいるのを感じてか、祐樹は沙織にシャワーを勧めてくれた。沙織はしばらく自分の体に刻んだ祐樹の余韻を楽しんでいたかったが、素直に従うことにした。積極的な女ばかりを演じていては、かえってうるさがられるかもしれない。男に従うしおらしさも見せておかなければ。

沙織が自分と祐樹の体液を洗い流して出てくると、続いて祐樹が、俺もシャワーを浴びてくるといい、バスルームに向かった。ふとトイレを見れば、その上にはさっき祐樹が用意してくれたコーヒークップとこの部屋の鍵がついたキーホルダーが置いてある。やがてバスルームから、シャワーの湯を流す音が聞こえてくると沙織の悪戯どころが再び首をもたげた。

キーホルダーには全く同じ鍵が二つ、一つのリングに通されている。そつと沙織はその一つをリングから外して、自分のバッグの中にすべり込ませた。不思議なほど罪悪感を感じなかった。愛し合い、体を重ねあつた者同士なのだ。合鍵の一つも、むしろ持っているべ

きではないか。

祐樹がシャワーを浴びている間に帰り支度を整えた沙織は、彼がバスタオルを頭にかぶってバスルームから出てくると、立ち上がった。今日は遅くなってしまうから、そろそろ失礼するわ、といって彼の頬に唇を触れさせた。一分後には、沙織は祐樹の合鍵の片割れと共に彼のマンションを出ていた。

2、恋するカレン（後書き）

是非とも感想をお寄せください。

3・雨のウエズデイ

代々木公園のハプニングから四日経った。あの日は土曜日、祐樹の会社は休日だった。キャンデイは月曜日が定休日、それ以外は店長の仁美と相談して、交代で休むルールになっていた。ただし客足の多い週末は、よほどの理由がない限り休むことはできない。週末は、早い日には午前中から服を買いに来る客もいたし、午後ともなればひっきりなしに客が来て、休憩時間さえまならないこともしばしばである。月曜日は定休日だから休みだったが、沙織はこの週、月曜日以外に、水曜日を休みとして申請していた。それで仁美は、定休日以外の休みを水曜日は沙織、木曜日は仁美と振分けた。

この前の週末に限っては、沙織はまるで使い物にならなかった。

何度もレジを打ち間違えていたし、接客もうわの空で、折角バッグから出しかけた財布をしまつて店を出て行く客さえいた。だから仁美はそんな様子を見て、何度もため息をつかなくてはならなかった。日曜日の午後、客足が一瞬途絶えた隙にとうとう仁美は訊ねた。

「ねえ沙織、なんかあったの？ 昨日のお昼から、ちょっと変じゃない」

「ごめんなさい。ちょっと体調が優れないみたいで。本当にごめん、店長。ちゃんとやるから……」

「別に責めてるわけじゃないよ。なんかあるんなら、相談してよね。頼りにならないかもしれないけどさ」

「うん」

店長という立場のせい、仁美の言葉は男を思わせたが、沙織のうつむいた顔を上げさせることはできなかった。結局仁美は、この週末ほとんど一人で店を切盛りしていたみたいなので、くたくたに疲れていた。しかし彼女の責任感、それでも沙織を心配することを忘れさせなかった。

火曜日の夜、仁美は店を出るときにふと考えた。明日は沙織が休

みだったな。

すでに沙織は帰宅していた。あることを思いつき、店を出るときに、仁美は店のドアに「水曜日、臨時休業」の札を貼っておいた。

翌日、仁美は昼近くまで惰眠を貪ってしまった。相変わらず使い物にならない沙織の分まで働いた疲労がたまっているようだ。帰るなりコンビニのおにぎりを二つ頬張って、その後はよく覚えていない。きつと疲れてすぐに眠ったのだろう。伝票計算を終えて家に着いたときには、もう夜中の十二時を回っていたが、それでも十時間近く眠ってしまったことになる。眠りすぎたせいか、少し頭痛を覚えて重かった。コンビニで買ってテーブルの上に置いたままのペットボトルには、まだウーロン茶が半分以上残っていた。ぬるくなってしまったお茶をぐびつと飲むと、ウーロン茶は一気に三分の一ほどになった。体中に水分が浸透していくような感じがして、仁美の体によろやく生気が戻ってきた。

生気と共に、心配が蘇った。

沙織はどうしているかな？

電話してみようかと思ったが、すぐに思いなおして、昨夜の思いつき通り彼女を訪ねることにした。彼女はこの週末こそやつかいな存在だったけれども、キャンディに来てくれるから何かと助けになっけてくれたのだ。体調が悪いのなら、何か美味しいものでも持っていつてあげよう。心配事があるなら、電話より直接顔つき合わせて聞いてあげた方がいい。店では話にくいことでも、二人きりなら話しやすいだろう。他に誰も聞いているわけではないし。

シャワーを浴びて、トーストとコーヒーでランチを済ませると、仁美は自分のマンションを出た。どんよりとした空からは、雨粒が落ちていた。もう一度玄関に入って、傘を取った。

沙織の住むマンションに行くためには、一度渋谷に出る必要があったから、そのついでに沙織の好きなトッパスのチョコレートケーキをお土産にすることにした。もし体調が優れなくて食欲がなかつ

たとしても、このケーキを見せれば食べないことはあり得ないという確信があったから。

渋谷でＪＲに乗り換えて、新宿でもう一度乗り換える。湿った重い空気が充満した電車に二十分ほど揺られた後、十分足らず歩いたところに沙織のマンションはあった。これで彼女のマンションに来るのは三回目かな？ 過去二回は沙織の誕生日だった。誰も祝ってくれる人なんていない、と嘆く彼女の誕生日に一緒に食事をする役目を務めるために。

だけど最近は何ができたようだったから、もうここへは来ることもないのかな、なんて思っていたのに。

五階建てマンションの三階の一番西端が、沙織の部屋である。部屋の前でインターホンのボタンを押す。ドア越しに部屋の中で響くベルの音が洩れ聞こえてくる。しかし部屋から沙織が出てくる気配はなく、インターホンにも応答はなかった。三回鳴らしてみたけれど、かすかなベルの音以外には、沈黙しか聞こえない。

やっぱり電話してからくればよかったかな。

仕方なく一度マンションを出た。マンションを出たところで、ふと思い出して携帯電話を取り出した。沙織の携帯電話の番号を呼び出してみたが、留守番電話の応答しか返ってこなかった。諦めて仁美は、駅までの道すがらで見かけたカフェテラスに向かった。

結局、沙織と連絡が取れたのは、カフェテラスに入ってから二時間以上経ってからだった。仁美はコーヒ一杯で粘っていることが申し訳なくなり、途中でお代わりを注文した。午後になってから家を出て、もうそろそろ夕方という時間だ。沙織は今家にいるという。

「じゃ近くにいるから、今から沙織さんところに行ってもいい？」

「うん……」

明確な根拠を持たない胸騒ぎがした。土曜日以来、沙織はしおれた花のように元気がなかったからなのかも。仁美はわずか五分ほど

の道のりを早足で歩いた。

今度のインターホンは留守ではなかった。インターホンを押してから程なく、ドアが開いた。ドアの向こうの沙織は、すっかり憔悴しきっているように見える。顔に血の気がない。病人というより幽霊に近い、と仁美は感じた。

「いらつしやい。入って」

力なく単語だけで話すのも、沙織らしくない。仁美は部屋に入っただ。努めて心配そうな表情は隠したまま。

「お邪魔します。へえ、きれいにしてるじゃない。あ、はい、これ。お土産買ってきたよ。トップスのチョコレートケーキだよ。あんたの大好物でしょ？」

「あ、ありがとう」

やはり単語しか返ってこない。ケーキを受け取るとそのまま部屋に入って行っただが、その歩き方はまるで滑っているかのごとくで、やはり幽霊を思わせる。きっと沙織は、何か屈託を抱えているのだ。その屈託が何によるものなのか、それを聞き出すまでは帰るまいと仁美は決心した。

沙織はテーブルにケーキを置くと、そのまま座り込んだ。前に来たときはすぐにキッチンに立ち、コーヒー淹れるわね、なんて明るくいつてくれていたのに。沙織の視線は、部屋の何もない空間に漂っている。隣に仁美が座っても彼女は“何もない場所”を見続けたままだ。

「ねえ、沙織。あんたさ、この前から元気ないわよ。本当にどこか体調が悪いの？」

ゆっくりと沙織の視線が、仁美の方に向けられた。仁美の顔に彼女の視点が定まった途端、彼女の目から涙が流れ落ちた。

「ひどいのよ、祐樹ったら。私のことをほったらかしにして、勝手に他の女を連れ込んでるのよ」

「祐樹？ それってもしかして……彼氏？」

沙織は頷く。

「だからね、今日も見えてきたの。部屋の中に二人でいたわ。でもね私のことは入れてくれないのよ」

「ひどい男ね」

「やっぱり店長もそう思う？」

「そりゃそうよ。だってあんたの彼氏なんでしょ」

沙織は再び曖昧に頷いた。その曖昧な頷き方は不明瞭な肯定であったが、仁美はそのことには気付かなかった。涙を流しながらおのが不幸を語り始めた沙織に、すっかり同情していたがゆえに。

仁美は昔から姉御肌なところがあつたから、このときも沙織の姉になった。姉である以上、可愛い妹の窮地を放つてはおけない。ただの痴話喧嘩かとも思ったが、さっきの沙織の涙としぼり出すように語った言葉には、痴話喧嘩を超越した苦悩や怨恨や悲哀がブレンドされていた。

「よし、今からもう一度その男のところへ行こう」

「えっ？」

「え、じゃないよ。あたしが一緒に行くからさ、その男のところに乗りに込んでやろうよ。それではつきりさせよう。あんたもいつまでも悩んでたって仕方ないでしょ」

「でも……」

「だってあんたが行ったときはいたんでしょ、その男。だったら善は急げだよ。あ？ “善” じゃないか。まあいいわ。さあ、立って」

居ても立ってもいられないといった感じで、仁美は沙織を促した。半ば引きずられるように、沙織は仁美に腕をつかまれて立った。沙織の部屋にはチョコレートケーキだけが残されて、沙織は仁美と一緒に部屋を出た。

雨はまだ降り続けている。

4・幸せな結末（前書き）

大瀧詠一のヒットナンバーに乗せてお送りした物語も、これで最終話です。おつきあいいただき、ありがとうございました。

4・幸せな結末

タクシーに乗り、沙織の案内で祐樹という男のマンションに着くまでに十五分くらいかった。夕方に差しかった時間の道路は、ところどころで渋滞が始まっていて、雨天が渋滞に拍車をかけていた。車内で沙織はずっとうつむいたままで、時折運転手に道案内をする以外は口を利かなかった。仁美は間の悪い渋滞にいらいらしていた。運転手は幽霊とオニを乗客にしているような気分で、ハンドルを握りしめる。

二人を降ろして、運転手はほっと安堵したような顔をする。仁美は沙織に、どこ、といって目の前に建つマンションのエントランスにさっさと足を踏み入れる。十階建てマンションのエレベーターに乗り、沙織は四階のボタンを押す。

エレベーターから三つ目が祐樹の部屋だった。二人はドアの前に立った。

「沙織、行くわよ。いい？」

沙織は仕方なさそうな調子で頷いた。仁美はためらわずインターホンを押す。沙織の部屋の前でもそうしたように、耳を澄ますとドア越しにかすかなインターホンの音が聞こえる。だが人の気配はない。三回押して、インターホンのスピーカーからは沈黙しか返ってこないことがわかった。仁美はがっくりとため息をついた。

「いないみたいね。さっきはいたの？ あんた、まさか鍵持ってたりは……しないよね」

「持ってるわ」

沙織は自分のバッグに手を突っ込んだ。しばらく自分のバッグの中をかき回し、首をひねった。

「ない。鍵が……ない」

「なくしちゃったの？ まあいいや。ここまで来たんだから、とにかく待ちましょ。さっきまでいたんだったら、待ってれば帰ってく

るでしょ」

今日はどこに行っても待たされる日だと思いながら、仁美は沙織とともにドアの前に立っていた。雨天のせいで、夕方から夜に変わりつつある時間帯は、冷えた空気を連れてくる。雨で濡れた洋服を通して、冷気は二人の体に絡みついて背筋をぞくぞくさせた。

冷気と一時間あまり格闘しているとエレベーターが四階に停止した。扉が開き、中からカップルが出てくる。二人は顔を上げカップルの方に視線を向ける。そのとき沙織の目が大きく見開かれた。

祐樹は自分の部屋の前に立つ二人に怪訝そうな目を向けて、薄暗い廊下を歩いてきた。背後にはカップルの片割れがついてくる。部屋のドアまであと数歩というところで、祐樹は二回ほど食事をして以来、久しぶりに会う女の顔を見た。

「ああ、誰かと思ったら。あのとき食事して以来ですね。お久しぶりです。それにしても、こんなところでどうしたんですか？」

「ひどい」

沙織の放った一言は、呪詛に満ちていた。彼女の目から放たれた憎しみは、祐樹とその相手の間を交互に行き来した。それに合わせて仁美もまた二人を見た。仁美はやや混乱して、祐樹に訊ねた。

「あなた、沙織の彼氏……じゃないの？」

「えっ？」

そのとき沙織のカバンから小さなペティナイフのようなものが取り出された。沙織は仁美の背後に立ち、仁美の正面に祐樹は立っていた。だから仁美も祐樹も、この沙織の行動には気付かない。わずかに祐樹の背後にいた麻友美だけが、沙織の不自然な行動を気にかけたが、仁美が死角となつて沙織の手もとまでは見えない。

あっ、と麻友美が声をあげた。その刹那、沙織が握ったナイフは祐樹の腹に納まっていた。一瞬、沙織以外は、目の前で起きていることを認識できずにいた。沙織は祐樹の腹から抜き取ったナイフを麻友美に向けた。そのままナイフをへその位置に構えて麻友美に突き進む。片手で腹を押さえた祐樹と反射的に手を伸ばした仁美が彼

女の実進を拒んだ。

一時間後、沙織は取調室にいた。傷害およびストーカー防止法違反容疑で、麻友美が携帯から通報した警察によって連行されたのだ。警察に続いて現れた消防隊員により、祐樹は病院に運ばれた。祐樹の立っていた場所は、赤黒いシミを作っていたが量はたいしたことではなかった。幸いナイフもさほど深くは刺さっておらず、落命の心配がないことは病院で診察してすぐにわかった。

仁美は翌日も店を閉めた。もはや仕事ができるとは思えなかったから。午前中は部屋にいた。ろくに眠れなかったけれども、目は冴えている。

午後になって祐樹が入院した病院へと向かった。受付で病室を照会し、病室の扉を開けた。ベッドに横たわる祐樹と傍らに寄り添っている麻友美がいた。ドアのところで会釈をすると麻友美が会釈を返してきて、ベッドの上の祐樹もかすかに動いた。仁美はベッドの麻友美と向かいの位置に進み、祐樹の様子を見た。祐樹はそれほど憔悴した様子もなく、意識もはっきりとしている。それを見て、仁美は謝罪の言葉を口にした。

「ごめんなさい。あたし、あの日は沙織と一緒に、あの子の部屋から来たのに。まさかバッグにあんなものを忍ばせているなんて知らなかった。それにあの子が『私をほったらかしにした』って言葉を鵜呑みにして、あなたのところへ行こう、と焚きつけたのもあたしなの。本当に……ごめんなさい」

「でもあなたもまさか、あの子　沙織さんっていいましたよね　がストーカーだなんて思っていなかったんですね。なら仕方ない。あなたのせいではないでしょう。それにあの子はあなたの親友なんじゃないですか？」

仁美は泣きながら、かすかに頷いた。嗚咽しながら、仁美はさらに悔恨の言葉を口にする。

「そう、親友のつもりだった。でも親友のことを、あの子がストーリーだなんてことを……あたしはまったく気付かずにいる。親友なんていない！」

麻友美が感情をほとばしらせている仁美の傍に寄って、肩に手を置いた。

「親友でもわからないことはあると思います。いや、むしろ親友だから見えなくなってしまうことが」

「麻友美のいう通りですよ。まあ幸い怪我もたいしたことはない。

『罪を憎んで人を憎まず』ということにしておきましょう。これからあの子には、あなたの支えが必要なはずです、きっと」

祐樹は怪我がまだ痛むのか、わずかに歪めた顔に笑みを浮かべていった。

「ありがとう。あの子はあたしの店で、本当にあたしを助けてくれた。あたしは原宿でブティックをやっているんだけど、あの子以上の店員なんて見つからないと思っていた。なのにどうして、どうしてかわからない」

二人のなぐさめは仁美にとってありがたいものであったが、二人の優しい声は仁美をいたたまれない気持ちにした。結局仁美は悔恨と謝罪の言葉だけを置いて、病室を後にした。そしてその足を警察署に向けた。

警察署で接見を申し出ると、しばらくして接見室に通された。透明な板で区切られた境界に阻まれた彼岸に、沙織はいた。青白い顔を下に向けたまま椅子に座り、じっとしている様子は、ベッドに横たわっていた祐樹よりもはるかに病人に見える。一分ほど何もいえずに仁美は板越しに沙織を見ていたが、彼女が微動だにしないので透明板に開けられた小さな穴に向かって話しかけた。

「沙織……ねえ、沙織！」

感情がそのまま声になったようだった。悲しいとも悔しいともとれる仁美の声は、接見室に響き渡り、ようやく沙織はわずかに顔をあげた。

接見は三十分くらいだったが、やはり病院で聞いた祐樹の沙織に対する記憶と彼女が語る祐樹の思い出には、大きな隔たりがあった。祐樹と沙織の話の共通点は、二度一緒に食事をしたことと先週の土曜日に麻友美と一緒に代々木公園を歩いていただけだった。いや祐樹のマンションまで行ったことも本当だろう。あとは明らかに彼女の頭の中で構築された話であることがわかった。

祐樹の誘いで部屋に入ったことも、彼とのセックスも、その後のシャワーも、彼の部屋から鍵を持ち出したことも、それらは全部沙織の中で作られた仮想記憶に過ぎない。仮想記憶は沙織の中で日に日に肥大し、現実世界との境界を曖昧にさせていた。彼女が代々木公園で麻友美と談笑しながら歩く祐樹を見たとき、彼女の中で、その光景は仮想記憶と結合したのだ。

結局沙織は起訴猶予処分となり、一週間ほどでキャンディに戻ってきた。仁美が病室で流した涙が功を奏して、祐樹と麻友美の心を揺すったようだ。あの部屋に悔恨と謝罪の言葉を置き土産にしたことは、沙織の役に立っていた。沙織は以前ほどではないものの、一応は明るさを取り戻したように見えた。

彼女が復帰してから始めての月曜日。その日は定休日で仁美も沙織も休みである。だがまだ沙織のことを心配していた仁美は、再びトップスのチョコレートケーキを手にして、沙織の部屋に向かった。今度こそ、沙織と一緒にケーキを食べよう、と思っていた。

沙織はおのが部屋に、ひっそりとわだかまっていた。仁美はこの日、ずっと沙織と一緒に過ごすつもりだった。今この子を助けてあげられるのは、あたししかないんだ、と仁美は思っていたから。チョコレートケーキの箱を開けると沙織はキッチンに向かった。今日はコーヒートを淹れるつもりらしい。仁美はちよつとだけ胸をなでおろした。

コーヒートの準備をする彼女の横で、仁美は皿とナイフを取り出して、チョコレートケーキを切り分けた。ナイフをケーキの入ってい

た箱に置くと、再びキッチンへと向かい、二人分のフォークを持ってきた。

仁美も沙織もランチはまだだったが、チョコレートケーキを二人で頬張ったら満腹になったので、お昼はケーキとコーヒーだけで済みました。

それから夜まで二人はいろいろ話をしたが、仁美は祐樹のことだけは意図的に避けていた。今度こそ彼女の中に堆積した仮想記憶を蘇らせるわけにはいかないから。それから一緒に夕食をとり、午後九時半くらいに彼女の部屋を出た。

「じゃあね、沙織。また明日、お店で会おうね」

「うん、今日はありがとう、店長」

「何いつてるの、元気出しなよ。食べっぱなしでゴメンね。久しぶりに沙織との話に盛り上がったからさ」

「気にしないでよ。ケーキごちそうさま」

しかし翌朝、開店時間の十時を過ぎても沙織は現れなかった。部屋の電話も携帯も彼女はいないといっている。午前中いっぱい待ったが、ちょうど昼休みの時間になると仁美は店を閉めた。明治通りに出てタクシーを停めると、沙織の部屋に急いだ。いつものいやな胸騒ぎがまた体中を駆け巡っている。

沙織の部屋の前でインターホンを押したが、案の定返事はない。ここ数週間の間に何度このインターホンを押したことが。仁美は一階に降りて管理人室に向かった。管理人に自分の身分と事情を話し、彼女の部屋の鍵を持った管理人とともに再びエレベーターに乗る。四階で降りるなり、管理人を急かせるように沙織の部屋を開けさせた。部屋に入ると昨夜のままのテーブルが真っ先に目に入った。夕食の皿も、ランチ代わりに食べたケーキの箱もそのままだった。ケーキの箱の上に仁美が載せたナイフがない以外は。

部屋に駆け込むと沙織とナイフが床に横たわっていた。彼女の左手首が置かれた周辺の絨毯だけが赤く染まっている。彼女が手首を切ったのは明白だ。ナイフにまだ残っていたケーキを切ったときの

カスは、彼女の左手首にもわずかに付着していた。

仁美は再び悔いた。あれほど祐樹の話題を慎重に避けたのに、なぜナイフを出したままにしまったか。そもそもナイフなど、まだ沙織の前に出すべきでなかったのかもしれない。しかもそのナイフはあの日、祐樹を刺したナイフに大きさも形もそっくりではないか。

立ち尽くしたまま呆けたような顔で固まっている管理人の前に、仁美は崩れ落ちた。バカ、と何度も動かぬ沙織を叩き続けた。沙織は仁美のなすがままに、僅かに笑みを浮かべたまま、ただそこに横たわっている。

（了）

4・幸せな結末（後書き）

是非とも感想をお寄せください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1438e/>

B面の恋

2010年10月8日15時33分発行